

輸 入 検 疫 の 話 題

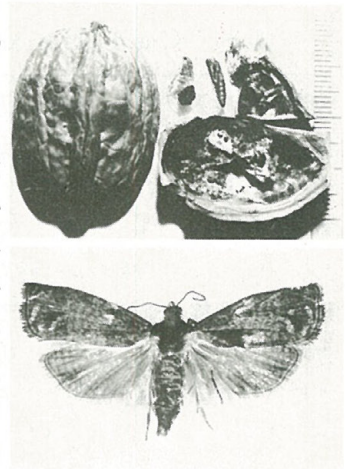
禁止品のクルミからコドリンガを多数発見

今年4月、東京国際見本市に展示するため、ソビエト連邦から発送された植物類20数品目の中に、クルミ、麦ワラ、土などの輸入禁止品が含まれていた。これら禁止品の焼却処分に先立ち、病害虫の付着状況を調査した結果、クルミ 1,080個中25個から25頭のコドリンガ幼虫が、また、約33%のクルミにコドリンガのものと思われる食害痕が認められた。

コドリンガは、ナシ、リンゴ、サクランボ等の大害虫であり、このため今年から万一の侵入に備えた早期発見のためのトラップによる侵入警戒調査が行われている。

旅行者が海外から持ち込む輸入禁止果実からはミバエが多数発見されているが、今回のように展

示用として選別して搬入されたものから、多数の禁止対象害虫が発見されたことは、生産地においていかに大きな被害を与えているかがうかがわれる。これは病害虫を水際で侵入阻止することの重要性を再認識させられるできごとであった。



上:禁止品のクルミと食害果
下:コドリンガの成虫

海 外 の ニ ュ ー ス

ブラジルに発生したPlum Leaf Scald病(PLSD)

我が国未発生の重要病害の一つである、プラムリーフスコールド病(PLSD)がブラジルの南部で発生し、急速に広がっているとの報告があった。

本病はアルゼンチンのパラナ川流域で最初に発見されたもので、パラグアイの一部地域や、米国のフロリダ州、ジョージア州など南部の諸州とアリゾナ州以西にも分布する。病原体は、ヨコバイ類が媒介する導管寄生性のリケッチア様微生物である。最近になって、本病病原体は米国の南東部諸州のモモで大きな被害を出しているpeach phony 病の病原体と比較検討され、培養上の性質や、血清学的性質などが同じであることから、両者は同じ病原体と考えられている。

ブラジルでは、サンパウロ州からリオグランデドスール州にかけての南部諸州で日本スモモの商業的生産が行われている。これら地域ではこの30年間、原因不明の衰弱症による大きな被害が続いていたが1978年にこの衰弱症は、PLSD であることが確認された。葉焼け症状や枝の枯れ込みが主

な症状であるが、発病して1～3年で枯死してしまう品種もある。ブラジルの農業研究機関のEMB RAPA の発生実態調査によれば、17年生の成木の4,000本が枯死し、残り4,000本も激しい症状の認められた激発果樹園があった、又、ある品種保存園での年次別の発生調査で、1978年にはわずか2%以下の発生率であったが、1980年に9%、1981年には35%にのぼる高率となっており、近年の発生の激しさがうかがわれる。

37品種のスモモで発生が認められているが、内31品種は日本スモモの系統であった。

本病は接木によって容易に伝播することがわかっており、発生地域から導入される苗木、穂木については厳重なる検査が必要である。

※Plant Disease 66:515-517(1982) (病菌課 西尾健)

発行所	横浜植物防疫所
〒231 横浜市中区北仲通5-57(横浜農林水産合同庁舎)	☎045(211)2299
発行人	江口照雄
編集責任者	松延正弘
印刷所	保土ヶ谷印刷株式会社
	横浜市中区北方町2-96 ☎045(621)3347